

地域の声かけ 夫婦救う

7月22、23日の豪雨で、大仙市では住宅の被害が全半壊32棟、床上浸水262棟に上った。だが、犠牲者は1人も出なかった。その陰には、高齢者夫婦が住民の声がけで浸水間近の住宅から避難するなど、地域の結びつきの強さがあった。

大仙 豪雨の危機から

同市協和下淀川の川原地区では、豪雨によって蛇行する淀川が増水し、あふれた濁流の通り道となった。直径50センチ、長さ10センチほどの樹木が何本も根ごとぎ流さ



●今と典さんと妻のフミさん ●今浩輝さん



れ、民家近くまで押し寄せた。市の調べでは、住宅全13棟のうち8棟が床上浸水し、2棟が全壊、5棟が半壊と判定された。住民たちは、道路が冠水し出した23日午前4時ごろに避難を始めた。消防団が避難を呼びかけ、建設会社員の今浩輝さん(45)も手伝った。「親の代から世話になっている」といって今と典

さん(92)とフミさん(84)夫婦にも外から声をかけたが、反応はなかった。すでに避難したと思い、別のお年寄りを隣の集落の避難所まで送った。

その頃、了典さん夫妻は道路の冠水には気づかず、1階で寝ていた。再び集落に戻った浩輝さんがふと了典さん宅を見ると、明かりがついていた。「じいちゃん、じいちゃん。すぐ避難しなければだ

めだ」と声をかけた。身丈度して、長靴をはくまで10分ほどかかった。外に出ようと玄関の戸を開けると、長靴を超えるほどの水が家の中に押し寄せてきた。間もなく、一帯は水位が2メートルになり、了典さん宅も1・2階ほど床上浸水した。

豪雨災害に見舞われた県や被災自治体が、ふるさと納税による支援を呼びかけている。返礼品はないが、寄付金の使途を災害復旧に限っている。県などは、インターネットのふるさと納税のサイト「ふるさとチョイス」に依頼し、「平成29年東北豪雨」(<https://www.furusato-tax.jp/saisai/>)のページを立ち上げた。まずは7月27日に県と横手市、仙北市が呼びかけを始め、31日には秋田市と由利本荘市も加わった。1日午後6時までに、県に97万

顔をみせた。郡山茂樹・市防災危機管理監は「犠牲者ゼロは、住民・地域・行政が一体となり積み上げた成果だ」とした。

岩手から「震災時の恩返し」

高田高野球部 大仙で片付け手伝い

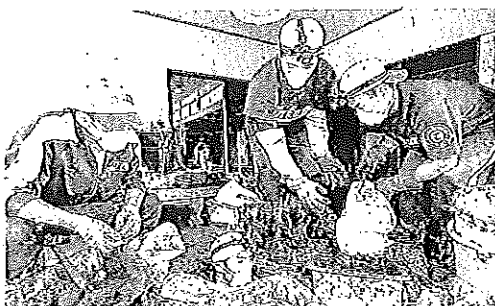
大仙市で1日、岩手県陸前高田市の県立高田高校の野球部員が、ボランティアで被災住宅の片付けを手伝った。東日本大震災の際、大仙市は岩手県沿岸部に災害ボランティアを派遣した経緯があり、「恩返しをしたい」と駆けつけた。

高田高野球部の監督、部長を含む57人は、二手に分かれて作業をした。多くの住宅が床上浸水した協和下淀川の川原地区では、主将の蒲生潤君(2年)ら17人が、今やエさん(76)方で床下の泥出しや庭に入り込ん

豪雨災害からの復旧支援 ふるさと納税呼びかけ

県と4市

2千円、仙北市に63万1千円、横手市に49万5千円が寄せられた。合計で163件、234万円以上にのぼる。県によると、寄付は北海道から沖縄県まで全国から届き、中には「一日も早く元の生活にもどれますように」「出身地の秋田での被害に心を痛めています」といった応援メッセージも添えられているという。県あきた未来戦略課は「相当の反応をいただいている。善意を復旧に生かしていきたい」と感謝している。(金井信義)



ヘッドランプをつけて床下に潜り、流れ込んだ泥をかき出す岩手県立高田高の野球部員たち。大仙市協和下淀川